

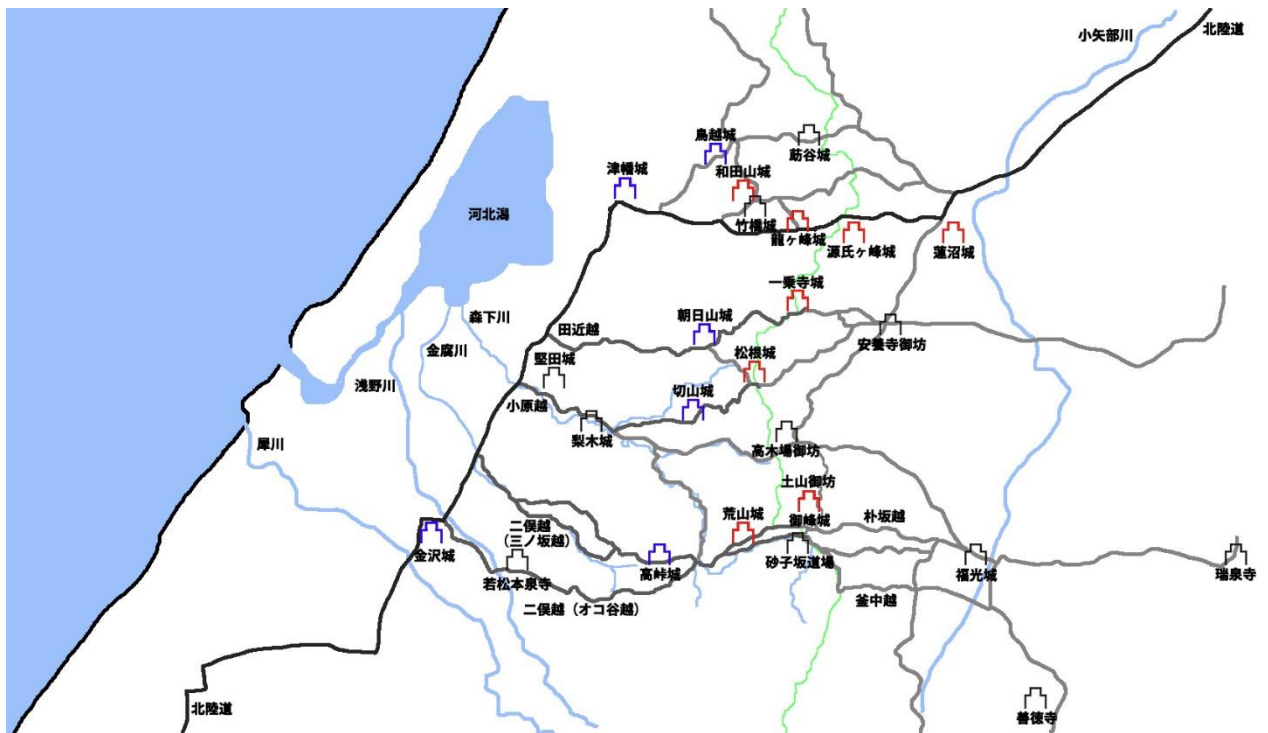
二俣越の加越国境の攻防を考察する

17期 塩谷 忠士

1. はじめに

これは私がきくぞくら第30号に寄稿した『『国史跡 加越国境城跡群及び道』の価値を考察する』の続きになります。前回は佐々成政による松根城の大改修が道（小原越）を切断した全国初の事例だということから、同時期に荒山城でも道（二俣越）を変更していたのではないかという私見を述べました。令和4年荒山城で発掘調査が始まったことから、いつもは草に覆われていた堀切などを改めて見たこともあり、もう一度荒山城と道の関係から荒山城をめぐる攻防までを考えてみました。

2. 加越国境の街道



北加賀には加賀・越中国境（加越国境）の峠を越える主な街道として、本街道の北陸道、その脇道として田近越、小原越、二俣越があり、枝道でつながっていました。一般的にこれら脇道の名称は国境の峠に至る加賀側の道を示す名称であり、他に通称名のない峠道がいくつもありました。

2-1. 二俣越

二俣越という道名は、二俣から加賀国内の北陸道と越中につながる道がいずれも2筋あった（二又になっていた）ことに由来します。

その道程は金沢城下を通過する北陸道の橋場から田井を經由して浅野川を渡り、若松、角間、清水、田島、二俣に至るオコ谷越と、北陸道の大樋から金腐川流域を御所、長屋（現・東長江）、夕日寺、伝燈寺、牧と進んで小二又から尾根へ上り、高峠城の北裾を通過して二俣に至る三ノ坂越の2道ありました。オコ谷越は、蓮如上人が七男蓮悟の若松本泉寺から二男蓮乗の二俣本泉寺支坊を訪ねる山道が余りにも難渋でオコオコと言われたことに由来すると伝えてあります。もう一方の三ノ坂越は道中に山王社があっ

て山王坂と呼ばれていたことに由来します。この三ノ坂越には長屋の手前で金腐川を渡って北方の尾根に上り、小二又からの本道と合流する枝道がありました。



オコ谷越には一向宗の若松本泉寺があり、三ノ坂越には前田方の高峠城があることから考えると、一向宗門徒が加賀を治めた時代には、越中一向一揆の拠点であった井波瑞泉寺と最短距離で結ぶオコ谷越が主に利用されたが、山間部が長く大部隊を動かすには不都合であったため、前田利家が金沢城に入城した頃には谷あいを通り山間部が短い三ノ坂越を使用することが多くなったと考えています。

二俣から越中に向かう道は、砂子坂、医王山を経由して広瀬館（現・館）に下り城端に向かう釜中越と、小又を経由して福光に下り井波に向かう朴坂越の2道がありました。二俣から朴坂越を登った最初のピークに荒山城は築かれ、朴坂越の枝道が釜中越と合流する地点に現在の城端善徳寺と福光光徳寺の創建の地である砂子坂道場がありました。一向宗門徒は当時敵対していた福光城の石黒氏の進攻が想定される朴坂越を抑えつつ、福光を迂回して井波瑞泉寺とつながっていた釜中越を管理下に置くことができる交通の要衝に道場を造ったと推測されます。

もし前田利家が二俣越から進攻したら佐々成政はどう対応したでしょうか。高峠城を陣営とする前田軍は荒山城攻略のため本隊を朴坂越から進めつつ、別働隊を釜中越から迂回させて背後から挟撃する戦略をとったのに対し、佐々方はかつて一向宗の土山御坊のあった土山に築いた御峰城から釜中越を迂回した前田方の別働隊の背後に襲いかかった。想像が膨らむ戦いですが、荒山城で合戦が行なわれた記録は残っていません。

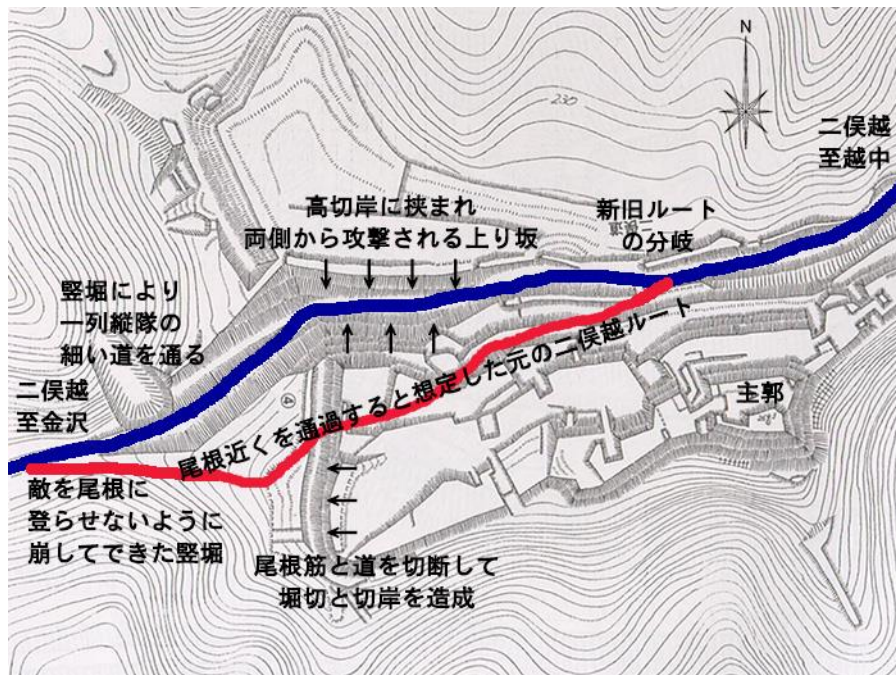
3. 荒山城と二俣越（朴坂越）

先に述べたように、金沢と砺波郡南部の井波や城端を最短距離で結ぶ二俣越は重要な峠道でした。天正12年（1584）、朴坂越にあった古城荒山城を改修した佐々成政はどういう防衛戦略を描いていたのかを考えてみました。朴坂越を二俣から進攻する前田軍には、細くなった道を一列縦隊で抜けてまばらに坂を上ってくるところを10メートルを超える高切岸上の両側から横矢掛けで殲滅、道を外れ尾根を上ってきた前田軍は堀切でくい止めて切岸上から正面攻撃で防御する。また、釜中越を迂回して越中側か

ら進攻する前田軍に対しては、尾根に設けた何本もの堀切で進攻を遅らせ、一方そのまま朴坂越を進む前田軍には高所の曲輪から横矢掛け、何としても時を稼いで御峰城からの援軍を待つ、どちらから進攻したとしても前田軍は大損害を被ったことでしょう。



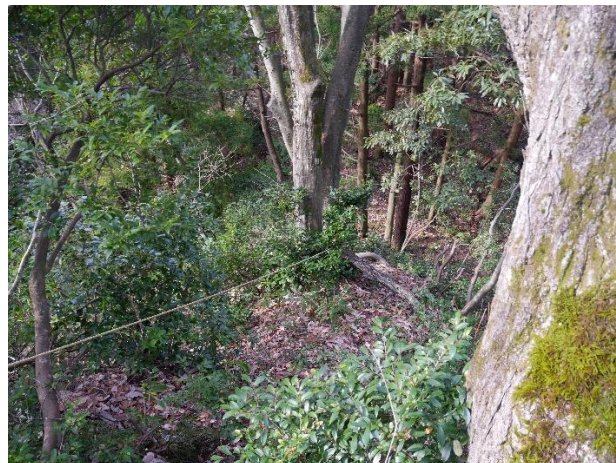
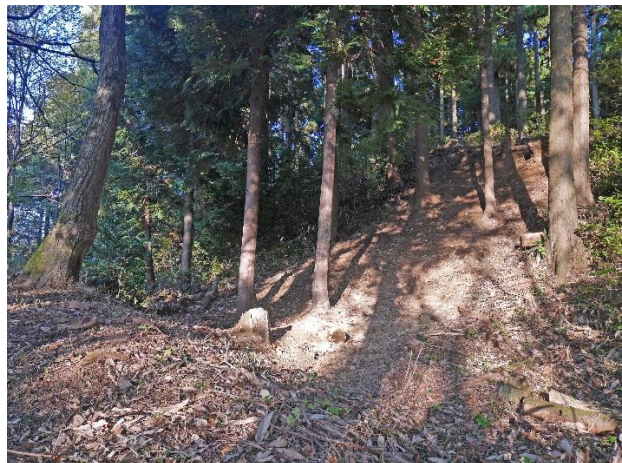
荒山城防御の弱点と私が考えるのは、坂を上りきったところの尾根に向かう斜度の緩さである。現在朴坂越を車で通行できる行き止まりにあたり、南北の曲輪に斜めに道が続いている地点になります。ここに前田軍が到達できれば一気に主郭に向かってなだれ込むことができたでしょう。一方、守る佐々方としては高切岸の両側に配した自軍を戦況に合わせて素早く移動させるには好都合な地形と考えられます。前田軍をこの地点に絶対に到達させないことを主目的とした改修であったとすれば、切岸や堀切の配置にも腑に落ちるところがあり、佐々方がどう改修したのか推測できるのではと思いました。



「加賀中世城郭図面集」(佐伯哲也氏)の縄張図の一部に二俣越(朴坂越)を加筆する(改訂版)

令和4年に荒山城の発掘調査が始まりました。城域が広いので1年では終了せず次年度も調査されることが決まっています。昨年の調査後に現地を訪れると、草刈りされた尾根西端の堀切が想像していたより浅いと感じました。これはむしろ尾根を攻め上ってくる前田軍は大勢を想定しておらず、荒山城の縄張の争点になっている尾根先の斜面の凹みが自然地形なのか堅堀なのかという問題について、前田軍

が尾根を容易に上れないように尾根先を崩して堅堀化した根拠のひとつになると考えています。これにより前田軍は尾根と堅堀に挟まれた細い通路を強制的に列縦隊になって進むことになり、上り坂でさらに進攻速度が落ちたところを両側の高切岸上から横矢掛けされる。決して坂を上り切らせないという佐々方の防御戦略が見えた思いでした。とすれば、佐々方が改修する以前の朴坂越は尾根を上って先の合流地点につながっていて、佐々方の改修により朴坂越の道程は変更されたと私は考えています。



発掘調査で顕わになった西端の堀切（南から撮影）急峻になっている尾根先の上から朴坂越を望む

4. 二俣越近辺の一向宗寺院

4-1. 土山御坊

高岡伏木の勝興寺の「本堂」と「大広間及び式台」の2棟が令和4年12月12日国宝に指定され注目を集めています。この勝興寺の創建地は、朴坂越（二俣越）の小又と小原越脇道の高窪をつなぐ枝道の一集落土山にあった土山御坊です。開基や創建年についてはいくつかの言い伝えがあり定まっていませんが、蓮如上人が土山に御坊を開き四男蓮誓が入ったという伝承があります。土山の有力国人であった杉浦氏の屋敷跡には、現在土山御坊の案内板と蓮如上人お手植えと伝わる伽羅木の前に上人像が建てられています。御坊跡と伝えられるのは屋敷跡の一段下に位置する平坦地です。土山御坊は戦渦で高窪の高木場（たかこば）御坊、末友の安養寺御坊と20数年で移転を繰り返し、佐々成政の寄進を受けて現在地の伏木古国府に移転しました。勝興寺は荒山城改修と同年の天正12年に伏木へ移転したので、佐々方は街道の要衝にあった土山、高木場、安養寺の御坊跡を戦略的重要拠点として取り込んだと考えられ、土山には御峰城を築いています。



杉浦万兵衛屋敷跡に建つ土山御坊案内



駐車場になっている土山御坊推定地



蓮如上人像とお手植えの伽羅木



御峰城の堀切

4-2. 砂子坂道場

釜中越の加越国境付近にあったのが、蓮如上人が坊舎を建てたのが始まりとされる砂子坂道場です。二俣から現在の医王ダム周辺を通り傾斜地に点在した砂子坂集落を上りきったところに位置します。寺域は後に福光法林寺に移転した光徳寺と、城端に移転した善徳寺との大きく2つに分かれています。天正12年にはすでに善徳寺は城端に移転していましたが、光徳寺は慶長19年（1614）に現在地に移転したと伝えられており、伝承どおりならまだ砂子坂に残っていたこととなります。前田方、佐々方いずれに味方していたのか、それともすでに大勢の一向宗門徒を抱える勢力ではなかったのかもしれませんが。



砂子坂道場 善徳寺跡



砂子坂道場 光徳寺跡

5. 終わりに

最近では山城の構造（縄張）だけでなく、近くを通る道が本来どういう道筋だったとか、その城がどこに防御の重点を置いて築城されたとか、そういう戦略的視点を持って山城巡りを楽しんでいます。次は小原越、田近越など他の峠道を題材にして城と道の関わりについて考えてみたいと思います。

参考資料

- ・「国史跡 加越国境城跡群及び道」パンフレット（2016年・金沢市文化財保護課）
- ・加賀中世城郭図面集（2017年・佐伯哲也著・桂書房）
- ・歴史の道調査報告書第三集 加賀の道 I（1996年・石川県教育委員会）